KODAK Color Control Patches © Eastman Kodak Company, 2000
LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

伊勢
000
251

南總里見八犬傳第九輯巻之八

東都　曲亭主人編次

第百六回

青海波を牽して景能稲村より來る
黑闇夜を犯して曼讃信館山に赴く

却説里見義實主は又姥雪夫婦をうち對ひて。我方僅解を示せ〻ど。顧べ東西皆因あり縁あり。就てあらろぬ〻死は與四郎が朴刀と音音が眉尖刀を携ずして。亦出処あるを欲。猛火の中に死を免れて。身を這山に置れ。相応〻る器械を。亦伏姫の亡魂の授け〻欲と。問れて與四郎額を衝て。ぢん疑ひ理りを這朴刀に可ぶ。呈義に武藏の戸田河原より。両個の児子力二尺八寸の首級を。悄々地に奪ひ去て。荒芽山へ赴て。折。身の護に携へを。當夜白井の寄隊を防ぐ。前種も既に竭て。しろがね呈をもて。幾個欲。近つく敵を砍拂ふ。躰て。猛火に身を焼て。死まくをする。折までも。尚

600
251

この刃い放さでやうと。我身と倶ふ這御山よ。領て置れけん。その折より有り。皆是神女の霊応ぞりたへば音音も亦ふ。昌襄ふ煉馬と沒落の折駿馬と倶ふ那眉尖刀戎賤妾ぞ。親牽ぞもあつ。推乃へもあて。上もる。隱宅ふ来て在一程身の護ふ藏措ぞと。又那白井の寄隊と防ぞて。あの眉尖刀の鋭鈍も。聊緋を佩りて。井と那折ふ喪ぎりへ。伏姫神の冥助ゆそ。與四郎ぐ朴刀と此彼同ド奇特ふ侍。尓るふ。鄙よ大江王ぐ今日上の淌登山の折障尋あらんを對治せんと。單身出て。與四郎も亦推續て。麓路投ていそぐと。有繋ふ心ひとりて。非除老女の果敢々あく。哀の要ふ達へ。ども上ふ。怒做を賊徒あぶ一個へとも。數ふ捕ぞと。思ふ心ふ身と。料らぞあの眉尖刀と。携へ。鳥許を思召れけん。寔ふ烏許を伺るめり。とらひて。吻々とうち。火々と。袖りて。急ふうち。掩ふ。老樹の花と。屑い薄ぐ。ぞあて。馨香ふ。実ある言葉の男々しぞ。義實感心浅ぐ。ぞ。所果て又寔ふ。思ふ優くる。立音音ぐ用心這夫ふ。て這妻あり。現一對る。忠魂義膽。今の世ふ。いとく得ぐ。就て若们ぐ。両個の媳婦。曳ぞとそらん。四早節と。そらん。開ぐ。兒子们も。那里ふ在るぞと。問れて。音音ハ。欺へけふ。隨即答まうまうう。鄙ふ他们も。賤妾と。倶ふ那樹下。まで。まあ。ぐ。御免と。蒙らぞ。一族渾て。見参ふ。入りまうう。んハ。無礼。ぞ。と。思ふ。よりて。推止めぐ。ん。目前ハ。ぞ。と。ふ。と。義實。ぞ。あへ。ぞ。ぞ。ぞ立も。疲れけん。ぞ。兒子ども。這方へ。召。けーうふ。ぞ。快々と。仰ふ。音音。ぞ。阿と。応ぐ。身と。起へ。凄へ。ぐ。件の樹。蔭ふ。退ぐる。程。もあ。ぐ。曳る。單ん。郎と。両個の孫兒と。伴ふ。ぞ。舊処ふ。出て。来。ぐ。大家程。ぐ。並坐て。義實。主ふ。拜見も。當下。親兵衛。找ぐ。出ぐ。老侯ふ。亦ふ。亦ふ。他们ハ。則音音ぐ。媳婦十條力二尺八ぐ。妻。ぐ。ぐ。曳る。單節。姉妹ゆぐ。兒子ハ。後の力二郎。尺八ぐ。ぐ。ぐ。

再生の奇特ハ既ニ與四郎音音ガ告ルトコロ真ニ知レリ。寔ニ天晴孝心ヲ若イ姉妹孝順ヲそよく姑ニ仕ヘモハヾカリて這応報あらんヲ且カ二尺八分迄腹の子あるを知らぬ。その期を過して安産せしハいよく奇異とのみ。今よりして與四郎音音ヲ花咲翁とも又花咲の媼とも喚ん然ばこそあれ若イ人も又是枯樹ニ花媳るれども憐むべし良人ニ後れて青年ニして孀婦ニなる。倘この憂ひ微らせば得て有りけ子ども沿生まず。倚伏ハ糾ニ纏ニ似て哀しむべし。教ばべしこそ若イ人ガ兒子ヲよ両個ヲ〻憐悲像へ年十許ニなるを折。我孫達の陪従ハせん男姑共侶ニ龍田ニ参て扶持を受よ城内ニ大江親兵衛ガ祖母姐真も在るれば詞敵ニよるん。先よくその意を沿よかしと懇ニ仰れば屯る単節ハ感涙の落るを押へて共侶ニ頭を抬げて熹ぬ。世ニ有るべき御懇命數〻忝身ニ餘ル。一家の幸とまうさんも猶憚ニ侍るり。皆是神女の御引接ぬそ。縁あれば〻大江の和子ハ餘慶を受て欽ビハ駅馬の尾ニ附

たる蠅の千里ニ到るニ似さらん。狡故主で仕る道節ガ。すべ見参ニ入らげ所ニ開ガ家僕の宅眷ヲ。我ガ惶うも恐ハ有り見を賜ハる。面目あるそ今ゆ〻ニ影護くも仕るかしとハ亦與四郎ガ音音も倶ニ稟告ル。媳婦ガ〻ハ〻ハ時宜ニあれど道節ガ先ハ〻ハ見参ハ寔ニ惶ひ〻ハ〻ハ義實主推禁めて古賞罰ハ安賊ニよ〻ぞ我ハ只若ガ〻忠信節義を賞るのミ微賤ハとそ數ん〻壁言ハ道節ガ七大士のごとく我照文ハ〻て幾番欲招ぬるもまく欲りもしかども他ガ〻ハ倶ニ固辭ちうして人具足せん折まで〻ハ〻招ぬそ。親兵衛仁を越ニ得るハ時ニ〻ハ〻ハ夫仁義ハ行ハ虧べ〻ぎるものなれども就中仁を根柢とハ那竹の節あるごく則仁と根とて。餘の七行ハ各節ハ然ば孝悌忠信も又義も礼智も仁ニ〻ハ〻ハ〻その德聖ニ至り〻ハ〻ハ故ニ八士の一人曼讃信の一仁先出せて忠孝義信礼智も悌も皆這仁ニ由らんのミ差とそ異なれ姥雪一家も倶ニ曼讃信の仁ニ由てその忠義節操の応

報ゆるゝ我聖人はゝ〻れ茲に仁を做ゝされども不用意にして仁を殺さん。僥幸なら。道理を盡して諭しなば。與四郎音音曳を單節も這它のものも推並て感嘆の外なりけり。そゞ中に親兵衛は額に汗しゝくなるく。老侯は稟を吾う目今仁字の説諭は尊く業とひへども。何でか臣等がこれを當らん。譬へば那鼠璞の如く。名は同うまれども。その物異に最恥しゝかり。就て那南弥六とゆえる。鑑位兒は既に隊を八が招了也。素生は見れども。尚詳らかなる義あり。那奴も拷問仕ん狡猾召るべうもと。詞急迫しく問ふうせば。義實吐てく領ぬ。ひて。有理左は右とうち紛れて。他が事は及ざりし。親兵衛徐は尋問ね與四郎音音曳を單節は稚児們共侶は瀧田の城我領て還ん姑且後方は退て。下向の折多ねか。と仰は畏む老夫婦両個の孀婦は両個の児子を先に立つゝ。皆共侶は近き樹下は退て。支果るまで跪坐ゝり。登時大江親兵衛は樹下は轂を置ゝる。生口荒磯南弥六が身邊は找ゝうち對ひて。それ鑑位兒南弥六とゝゝん。汝は當初當國洲崎の俠

客とけ。玄垢ぞ外孫ぞ。神餘の子孫はゝ。憂て分ち死地を蹈む。昔在玄垢ぞ行て光弘主を犯ゝる。事を償んと欲ゝせは然もあるべきゝ。理義も邪正も思ぶは。逆賊素藤が與は我老侯を犯ゝ。まゝんとせは甚麼ぞ。実は神餘の為を思ぶ。九三四郎們は説薦め稲村殿義成を訴事ゝて恩禄を乞ひ。又ぞは茲は心のつぶゝ狡なる愚は丙丁相似ゝ。取るよりも乞白物なる。低ても陳るよりあるぞと連は向ふて南弥六る羞る頭を稍抬て小可玄学俗骨ぞ血氣の勇を言とする弱冠の初より俠を磨く意を立てみゝ。許て世の豪傑ぞと思ひ誇りは井中る蛙は似る浅智短才後悔脇を噬ども及ばぞ。御京和君は轂れ折疾楚を堪ぞ。逃迷ぞ。峯上の方へ走る程は那姥雪とのは谷は撞見て捕られは撲傷はりて進退不便の命運茲は盡るゝん。縦みゝ。新は恩免を請稟ぞも赦ぞ。大辟の罪戻を爭何せん。死も亦恥は代ゝ。只速は死んのぞとのひく。傷の樹は觸て頭を摧ぞて死ぬ。親兵衛ヤヤ。

と牽禁めそ。されど南弥六狂へる欲賞罰の上ゐ在り大辟不赦の罪人なるゐ次恐ゐ死まくもとも。なるでゐ自殺を許さるべ忍心を鎮めく听ねか。汝ハ那定包ゐ謀られて不測の罪を釀しる。外祖洲崎無垢三ゐ。本性ゐ似くりと思ふ狡我ハ當年無垢三と倶ゐ當國の侠客なりけ。杣木樸平の曾孫ハ然ば我父山林房八を大父の汚名を雪んとて身を殺して仁を做ゐ。我身ゐ至て思ひけるに天の資神の庇あり世ゐ侠者といふべきの不義ゐ與せず奸邪ハ貧げ善人の與ゐ憂を分ちて。よく理義ゐ明るを世ゐ命けて義侠といふ我父房八即是ハ且我曾祖杣木翁と汝ハ外大父無垢三ハ倶ゐ金碗氏の舊僕なりく八郎王の剣法を受るゐも偽りなれ乃祖とハ我ハ四世汝ハ祖孫三世なれども行状霄壤の差ひあり辟ハ這天津九三四郎のごとく當年那古七郎と倶ゐ主君の先途ゐ達て戰歿の功ありけ。天津兵内が弟ハ兵内と倶ゐ戰死をしける。那古侄ハ犬士の一人我ハ父犬田小文五是なり。因ておりゐその先人の忠死も亦得失ゐ異なるとのるけれども。子孫の功狀同じかれば受る所の栄辱禍福かくの如く差池あり。その是と孰思ふべし。況れば若ハ縲絏の恥辱ハ此自是自業自得也。憐むべ。昔を思ハ我も亦空六谷殺生の情ゐ忍ぶあり。陳考よりゐ詭ゐて良民ゐ。まく願ハ我繼母の功ゐ易て命乞しる。さも女身の非を飾るゐ。諭せば南弥六頗る働く。仁義の教諭肝胆ゐ銘して身後まで忘るべ。非除這身ハ許されぞも今ハも恨ゐ。犬馬の齢呉竹の四十ゐ泊ぶ今までも身の愚魯を知ざりければ大父の汚名を雪んと思ひて罪を黙ねゐ皆徳也。ひたすらに曾陪話て已ざりと。親兵衛然こそ領して退て義實主の身邊ゐ。まあり。て亭まゐ。言皆听せ。ひけ。他も招伏仕りゐ別る仔細ゐ。ゐ告るを義實ゐ聞ゐ。鄭ゐも既ゐ。ひけ。他ハ瀧田の獄舍ゐ。毀ぶ。て。亭鞫問て言実るべ安房殿ゐ。ゐえ。げて。都て那里の下知ゐ。べ。命乞ひその折の時宜ゐ依るべ。ゐ。ゐ。と宜ひるべ天ゐ仰ぶて思ひかけ。ゐ這那の問答ゐ時を移して。上境をいまぐ

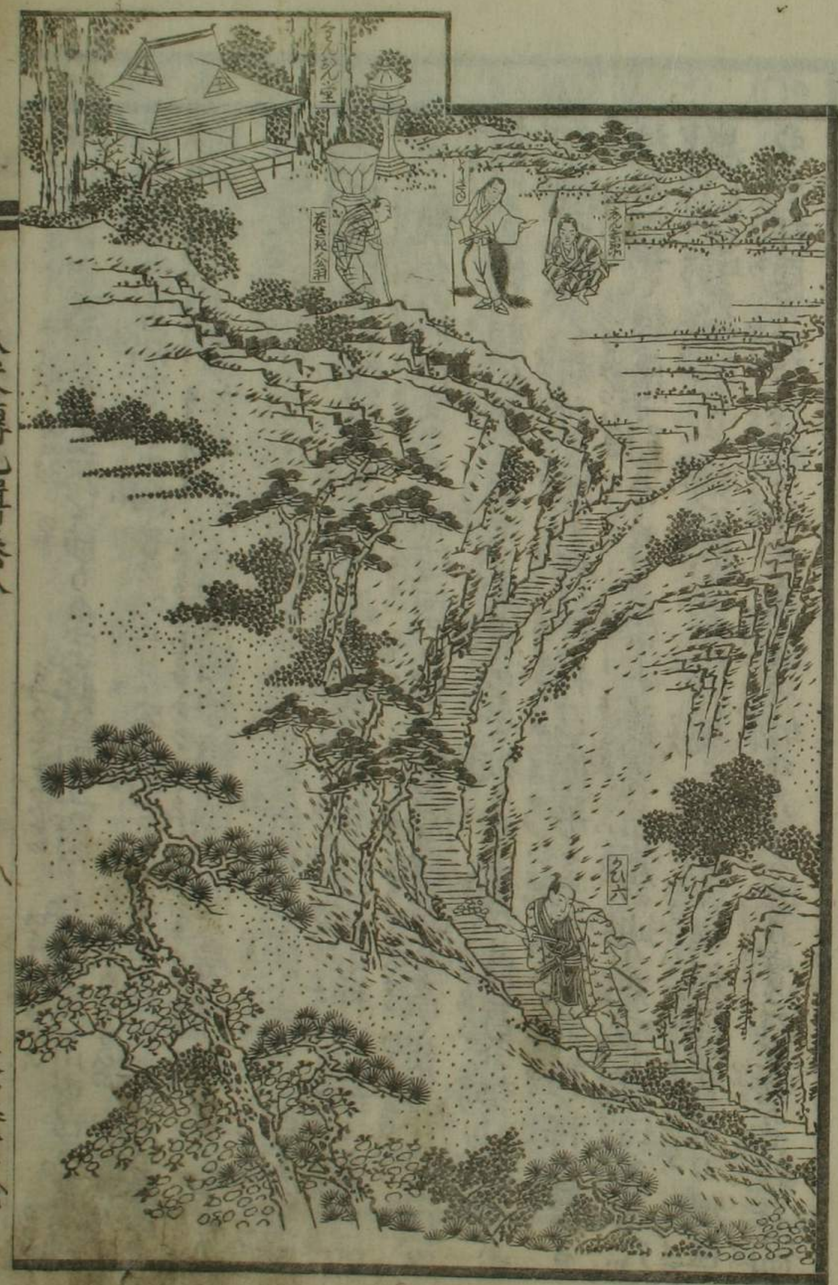
果さぞ快やべーと遽しく身を起さんとあゆむ程に見六目は左右よりに找ぬ〻亭に走り萠
三ぐあん花を求めてかへりまゐりつる又蜑崎十二郎照文とその餘御伴の近習両三名倶に
まゐりひしぐあん支まくる最中に徒れ〻ぬ〻ぐ俄に後方に扣てそは〻れと呼えあれど義
實主は亦復石に尻を掛てそは〻と折く快哉ねと仰せ目見六も阿と応く退くる程ーもあ
らぎ東峯萠三の莽草と桃の花をどっさる持く找き出豆照文以下の伴當も倶見参に
入りけり登時萠三ぐはるる郷尚に仰付られるあん花を求めて還りまゐんとせー程に十一郎
們は御登山にあん伴當の寡なきを心りとーとそ倶に推参仕の如くに君の御危難あ
アーと幸ひに神童の賊徒を捕捕りーとの事大槩の側聞して皆共倡に一とべ驚ぎ又歓
びて御高運のあらまを今ぞ感佩仕りぬと祝ー亭其照文も找き近つきて亭に郷尚
御登山のあん伴を許さるのぐりーかぞ萠三をもって亭に郷尚
らーを一霎時に那里にひしぐ左も右も堪くたにあん叱と省ぎ同志の甲乙を誘ひて推参

仕りる甲非に御危難の事の趣伏姫神の霊驗奇特及犬八の犬江親兵衛が支の顛末
并に與四郎音音們一家児の再生の奇談を料らぎ君のあん後方を粗听知りて又ち
らに胸を洗ーひ事皆君の御洪福最扨ーひと奇なるかれ義實主は含笑ぐ點頭て
然に郷尚若們を制め禁に在せーかども今八犬に要ある折に招れもよく来るかを萠三を
一両個の同僚と倶に這生口們を快禁に牽下して那首を雑兵を領て今宵瀧田に遣
を有司に告て獄舎に數ぎれ又目に音音鬼の單郎と両個の稚児が二郎尺八と大山
寺に案内を今宵の那首に止宿さを我も亦時宜より又那寺に立寄りて暁を等て
明日歸城に親兵衛と與四郎を我御道に寺に走ぐ十一郎見六們は這里より登山の伴に
立つべ就中十一郎は親兵衛が年四の秋神賜に遇ひーと他ぐ生死存亡を思難くーち不
娯ーに料らぎも今對面を年来の胸開けに寒奇ーにぐるーぐやと仰せ照文額を衛く
御諚の如く和漢今昔世に神童をまれに身長さへ恁猛可に大ぐるーを一大奇

事も古も儔ふ。後の世に有ん前よりつらく相ふ幼貌に耗ねども。その人とも
ゆゑ聞せばいふて認るべ猶後ふ東方の物くさを聞ぶ。夷べ樂くに却要緊れ一
條を禀上漏に稲村の大城に廿屋八郎景能。次九君の名使として駿馬一疋我
牽ふ。今朝瀧田の御隠館へ来着仕れり。君は今朝未明より大山寺へ御参詣のよ
ふを偽兼り。快見参入ぞと。躰て那首へ赴ふ那首ゆえ御坐ぞ又御登山の
趣を聞知りて。ゆゑ遠を慕ふ遠山の麓まで参ふ。臣們ぞ許せぬぞ送置
せめ。こゝ這里まで伴つて御下向ぞ等しに件の駿馬は青海巷村より今番頭献
上と。ぞ一頭は館山へ御陣へ牽て。ぞ嚴君へ。ぞ又一頭は老侯へ。
獻らぬふと。ぞ聞ふ義實主は聞ぞ。ぞ義實主は聞ぞ。
鈴べ。ぞ氏元清澄們に禀薦ぞ。ぞ親兵衛找出て願ふ。その名馬を
山可ぞ貸ぬ。今より館山へ騎走て。立地ふ御曹司を極含ぞ。と惱ぞ義實

ぞ。ぞ壮ふ哉男士の情願開も鈴べ筋れども義成の大軍で。動べ。ぞ勍敵。
和郎一個ぞ成とぞ。ぞ開も歸城の後左も右も。ぞ然まで。ぞ制ぞ許
ぞ。ぞ親兵衛は。ぞ思ぞ。ぞ爭難て。ぞ。ぞ退ぞ。ぞ程ふ義實主は先や
墓所へ。ぞ杖を極含て。ぞ立て身を起ぞ。ぞ前ふ遽く。ぞ花ぞ貝六ふ遮與
ぞ。ぞ當下與四郎は主ふ立親兵衛照文貝六ぞ左右ふ從ぞ。ぞ程ふ音音ぞ又
曳ふ單節と力二尺八寸を侍ぞ。ぞ目前三自餘の近習と俱ふ跪坐て目送ぞ。義
實ぞ聞ふ。ぞ前三們ぞ。ぞ。ぞ狄ぞ生口毎を領て。ぞ瀧田へ還ぞ。我は今宵大山寺へ
止宿ぞ。ぞ。ぞ有司ふ告ぞ。ぞ。ぞ及ぞ。ぞ。ぞ夜分の小心戸の守衛も。ぞ。ぞ。ぞ快ぞ。ぞ
ぞ。ぞ。ぞ。ぞ前三は唯ぞ。ぞ。ぞ。ぞ跪坐ぞ。ぞ既ふ。ぞ義實主は遠ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。ぞ
程ふ大家ぞ。ぞ。ぞ身を起て。ぞ前三は自餘の同僚們と。ぞ俱ふ五個の生口毎の索合ぞ分ぞ。ぞ
牽立れは音音は捨ぞ。ぞ肩尖刀を又携ぞ。ぞ。ぞ。ぞ。

里見老侯嶮岨を凌ぎ
富山峰上の觀音ふ賽を



却説里見義實主、山路を陟りゆくこと、繞ふ両三町ばかり。一條の谷川あり。けふ、禁麓
河の水源なれども。此もまた水の涸ちければ。世日をうと同じくまた前回の即伏姫の墳墓ある
品山屋々、大法師が年尚少くて。金碗大輔孝德と喚れ。時八房の犬を殺めんとする。その
鳥眼銃の銃丸のまりて。伏姫落命をゆくるゆきを思ひ出られて。涙と共ふ目も迴ふ霞殿龍
なる山又山の品根躑躅花開初て遅々と長き春の日も。路の菜も那這と。結ぶい夢ぞ浮
世ぞと。觀念の外他事もなし。抑這河の水涸れども。畏壁緑苔高く蒸て。升降不便の
難処ふ。あれば。親兵衛と照文が。義實のを扶ふ。或ハ藤蔓ふ攀り。品棱ふ
て。を攀ぢ。辛〳〵前回ふ辿るふ。與四郎が朴刀を。衝立々々先ふ找て。荊棘を拂ひ無こる
枝を推揚て。徐ふ道ふ引ふ。せけり。既ふして義実が品山屋ふ辿り着て。先那這と見ゆ。
崖門の塞ふ地炕ふ。て鍋を攀ぢ。その餘ふ碗と折敷とを。桶柄杓。擂盆菜刀。燧匣
あるのを。裡面ふ莚を。幾枚ふ布れども。各夜物ふ。どれ。ども義實これを訝りて。親兵衛

們。ふの手束。夜ふ入ふて寝ふ。春冬の寒け。夜ふ。食ふ。ふ。欲甚。麼ぞ。と問
れて。親兵衛然ふ這品山屋ふ。存ふ。と。冬の夜もいと暖く。汗ふ。可ふ。れば。食ふ。欲ふ。くもふ。ぞ。
夏ふ。ふと涼〳〵て。蚤蚊もあ。ぞ。ふ。ふ。ふ。義實點頭ふ。て。然ふ。ん。開ふ。ふ。奇ふ。と稱へて
躰て。伏姫の墓頭ふ。迫ふ。ふ。ふ。標の松ふ翠ふ。增て。梢高く。ふ。ふ。然ふ。ふ。掃除ふ。幕
隙ふ。迷ふ。ふ。小草ふ。ども。刈拂ふ。墓ふ。今朝。植ふ。ふ。ふ。ふ。
香爐ふ。焼ふ。た。煙ふ。灰ふ。滅ふ。ふ。是ふ。ふ。與四郎ふ。音ふ。ふ。向ふ。ふ。猜ふ。
登時鶏舶貝六郎が齎ふ。る。花ふ。植更て。石滿ふ。汲ふ。て。沃ふ。ども。與四郎ふ。ふ。を。郡
助て。准備ふ。ふ。も。整ふ。れ。義實が懐ふ。り。一。裏の香ふ。ふ。ふ。件の香爐ふ。焼。
ふ。廻向ふ。時ふ。も。移ふ。べ。介程ふ。照文貝六ふ。跪坐て。後方ふ。ふ。ふ。れ。山ふ。慶雲を吐て。奇
峯ふ。ふ。ふ。ふ。風ふ。松濤を起て。彈琴ふ。似ふ。靈ふ。ふ。石上ふ。粘て。五彩眼ふ。美〳〵。異
禽ふ。幽谷ふ。ふ。て。友ふ。求ふ。聲ふ。沙石ふ。黒白ふ。雑ふ。碁仙ふ。見ふ。由ふ。飛泉ふ。底

當と見へて深淺を料るふ易かり。実ふ是塵外の一天地東海無雙の仙境なり。
と憶中ふ賞賛あるりけり。且く義實主へ念一果て退くのふ舊ふ為のを憶れく。
憶ふを嗟歎せられり。又犬江親兵衛も世の眼を意さんを墓ふ朝ひて拜礼を次ふ照
文貝六郎與四郎も許されて迭代ふ拜ふけり。就中照文は亡父輝武のをもて今亦ふ思
ひ出て哀慕の情を方ふ堪ず。是一蓮托生と念じて稍能ふけり。祭果て義實主へ
這伴當们へ従て那道級を登るふ塚あり。そ赴ぬ。義實與四郎音音们ふ築建ふ
とゆえる馬塚も築ふ。義實主へ両個の塚を左ふ右ふ廣して現親兵衛ふ伏姫の
靈ふ祭ふ。ふ午と成ふ六合今ふ。這丘を大塚とのを喚做れども大塚を信乃ふ
家號と相混じて宜かるを因てふの兵改て犬馬塚と喚ぶべれ衆伴ふの意を信へと仰ふ
大家異口同音美ふと応けり。ふの後居ヨの歳月を歴て品屈る家伏鍋釜へ化しく石ふ
ふりくるる犬馬両塚と共ふ里見九世義安の時まで有けり。其後いふ者ふ今ふ。

話省饒舌。登時義實主へ照文と與四郎を喚近つけて宣ふ。茲より峯上へ徒ふ
ら。卒観音堂へ参詣せ與四郎案内せよかと。只管ふいそぐふを照文諫め宣ふ
ら。御談でいへども亦復那里へ迫せ。御下向山路ふ暮て尤不便ふいん願ふ異日
参らをあへけのふ限ることふ義實ふあへ。否我も亦其頭のふ思ざるふあねども。
嚮ふ危難を免れも又親兵衛を得たるも皆伏姫の神霊の冥助擁護ふ依るとへ
ども他ふ菩提の與ふとそ。建立る峯の堂ふ観音薩埵の妙智力を加へ給ひも知るべ
らず。その佛恩を思ひ報ふ賽願を疎ふせんや況建立の後幾程も経ず山河の為ふ路を絶
れて詣ることを沼ぐりふその路開けて茲ふ来ることを。
論ずる呂音進ふ理り有れば照文们ふ再議ふ及ばず廝従ふて躰て峯上ふ倶ふ行ふ。と
て路ふ峻嶮ふ熊徑鳥路ふ羊腸ふ主従辛して登る程ふ。ふ尽ふ山顛ふ届りて
那這とを見直ふ。安房と慈の海ふ。武蔵伊豆相模の海濱まで。煙霞の間ふ見

走船の白帆幽に一葉の波濤に漂に異なるを況湖津鳥の夕陽に群飛ぶ光景百花の春風に翻るに似たりけり然ば補陀落山の秋の月も夜々毫に隈なく照べく祇陀付林の春の鳥も朝々暢ひ来ぬらんと思ふ可の霊場佳景嵯峨たる奇岳八方に削成せる及べからぬ屈曲する早蕨に画る波の磯打紋と疑ふ建立せられたる二十稔有餘を歴されども観音堂荒もせず只緒塗の柱高欄などの風雨の為に処々剥るもあれども與四郎音音が六稔以来仕まつり一甲斐あり人詣ねども香華絶ず蜘網もなく鳥も棲さず尊さ更に尊ふべきものあるを貝六郎が茲まで携来る花の折枝を仏餉に供へ仏前の花瓶に植加るを登時義實主は堂内に陟て焼香默禱を凝らしつゝ親兵衛照文與四郎貝六も主の後方に並跪て共侶の絆をけり是より下向に赴ぬに登る石ぞ似ず歩も枝まで疲労もあり所なり義実は照文と親兵衛は亨を十一郎はけに料らずも親兵衛と再會の本意を遂て他が恁大に歓こる神助の奇特を知るといへども左に右に暇なくして我直則を憚りて別後の情義を盡さるべ折ふし山路交加人多けれども相譚ひも叮ねるに疲労を忘れて好慰に暇なんぞと仰の照文然いに御内人はまろれども小臣の親兵衛と憂苦を倶にあれば別後のなも問まほしく恙なくして扶けを舒るに暇なくいとゞ雙て伴に立ぬ乾を隔て辭を撥く心地のまして然ばに御免を蒙て這通路來一方を話り慰めんと答まうに親兵衛とも厮詰めぬ程に那神罰に心地快くして舵九郎が後甲斐の石木ぞ信乃道節は環會る其頭のなを刎と走濱路姫の上までも甲乙とるくも出れば親兵衛も亦照文が鄙に漏らして我と姥雪一家のなまでも皆詳に説示を照文いと奇へと稱て連に歩の找むを覚ぞ側聞る貝六郎も憶に止息を吻くまでに其の言毎に敬焉ぞ幾番とるくかへるに亦程に義實主は甲乙の物くさしの最典あれば矢局に入りて来るとおぼえぞ又舊の樹柱間なる邊まで次の来ぬの程に然ても長くして春の日の生憎越に暮果て加以今宵は烏夜啼

るゐ樹の下もけいとぐらく。其里とも絶て辨りそ。主従倶ゐ找難て殆困ゞ果る折ゝ。去向の路も閃々と焦火張燈見えて人馬許ま近つゝ来れけり。登時義實主従い這衆人の親疎禍福を量り難く路傍ゐ杖を住て熟視るゐ他們ゞ引提る張燈の花弼い中黒へけれい僅ゐ心ちゐる。照文い貝六と共伜ゐ找出て来れるいあん伴當們欽上ゐ這里まで御下向ゐ。快燈燭をもて来ぎそと両聲高く呼りけり。當下来る伴當們応と答て路傍ゐ。ゐ。これて三幻ゐ和えるそゞ中ゐ近習両三名持る張燈ゐ抗て遽ゝく找を来る照文們ゐ。ゐ對ひて鄉ゐ目萠ゐ仰を高ゐ。ゐ。折今日の御危難後意ゐ御利運ゐ。ゐ。ゐ。

這馬は當國蒼海巷の牧より出さり既に齊き亦青日の駿波に似たれば牧士何命けて
青海波と唱做すと兼りぬと告れば義實領ありて寔に毛色の波に似る青海巷に
相稱へる。そ開は好名の後々まで如右唱まべられそ只管賞讃ありつ。側に侍りて親兵衛を
ながめつそ和郎這馬と何とうたへると問れて親兵衛然いれ子の所為に語道に似れど小臣曾聞
ることあり約馬は八尺以上を龍と為し七尺以上を駿と為す六尺を通て馬と為し良馬は頭を
王と為宜く方を為べし目と丞相と為宜しく明を為べし脊と將軍と為必是強と欲も腹を城
郭と為好張ると欲も家と四下と今と為して長を為べし眼は高く匡を為も眼睛鈴を懸る
如く眼下は蚕と鑿と懸る像く鼻孔大を為も鼻頭に王火の二字あり口中尤赤かる
べし膝骨は圓と張を宜しと為耳は相近て堅く小を為も厚為べし伏龍骨は砍く
頸長く雙趺大を為て突出蹄は厚く腹下平に七八字あり尾骨高く七無を為て
長を為べし。かくの如くを千里の馬と此は是なれども李伯樂が相馬經の崖略に欲這

馬高七尺有餘骨法右の趣に及ざる者ありとへども龍と驪の間を能く騎る者は一日に
百里を行くと易るとて其の雜毛の波濤に似れば龍種ともいべべし。されども外飾も
世に稀なるを愛るのみ良馬と做すに足らぬと阿容なる氣色もなく凛々義實主
駿に感じて適要ある才子なるかな今這馬を和郎に取せん。鞍鐙さへ皆具して牽りて來
たれば便り好しうち乘て我先に立て非常に備へべと仰は親兵衛忻然と額を衝て賜を
拜ぬ又凛々烏許かまりうれいへども小臣が曾祖杣木樸平は青海巷村の民なれども
其の馬の邦里の牧より出さるんの舊縁あり先乘試いんとのひて躍て牽退けて閃りと
うち乘る鞚法に暴馬なれども靜に主のなるに隨ひけり登時大江親兵衛は輪騎を做
もと両三遍舊処に下立て又元前に參りかけり義實主は親兵衛が武藝旅力の捷
れを衝に目數るあのいーど馬術まで能せで。と思ひのべ這暴馬を賜りて乘せのいる精
妙かくのごとふあるれば。感悅淺からぬ況照文以下の伴當孰も甘服せざるべきも憑

文溪堂藏

考思ひけり。小程ゐ義實主ハ晴る星とうち仰ぎて。噫漫ゐ兒要ゑ支ゐ甲夜過ぬ
らん。卒せくべーと。登兒を放ちて立あへ。鑣奴ゐ女ゐ牽よ。馬ゐうち無ゐ程ゐ親兵衛も
亦青海波ゐ乗てゑ先ゐ立ゐけ。ゑの餘苫屋景能ハ稲村より乗りて来る馬ゐ乗れば許
されて。騎馬ゐ乗後方ゐ従ふう。徳而照文貝六與四郎們近習外様の伴當。左右ゐ従ひ前
後を衛りて。張燈蕉火振照らしつつ。ゆくとはなく幾ゆくゐ小門目ゐの身ゑ伴當と大山寺ゐる
道人両三名ゐ炬を秉して。迎ゐ来る路傍ゐ跪居て老侯ゐ見参ゐ義實主ハ音音
們を那里へ送り届うと。報るを聞て只管ゐ馬の足極を早めゐ既ゐて大山寺ゐ立
門ゐ来ゐ。躍て馬より下立て。玄関ゐ赴ゐ程ゐ。住持ハ役僧を領て。遽く出
迎へ。躍て客殿ゐ案内をして。茶を薦め果子をまゐ。富山の奇談神女の霊驗
聞ゐ隨ゐ。出てその歓びを舒ゐ。徳り程ゐ役僧們ハ行童喝食を給侍ゐ立て。
先准備の夕餐を老侯ゐ羞めゐ。次ゐ親兵衛照文們都て戎十名の伴當ゐ。

送る隈ゐ夜飯をゐめて。馬ゐも秣を飼ふる。曾待極めて叮寧ゑ。中ゐ親兵衛
ゐ。老侯と一席ゐたうべを許され。徳而伴當們の餐送
ゐ果うと。義實主ハ與四郎と音音曳ゐ單ゐ郎們ゐ。鄭ゐ聞ゐ奇
譚の漏ゐるゐ。ゐ弦ゐ。皆並て客殿へ召登ゐ。ゐ後方ゐ照文景能貝六
目們ゐ侍り。登時親兵衛找出て。義實主ゐ稟ゐ。我君願ゐ。小臣ゐ權
且暇を賜ゐ。恩賜の馬ゐ乗走り。今ゐ館山へ赴て。御曹司を拯ひ合りなゐ
ゐ。とゐ義實主ゐ。開て。亦酷く性急ゐ和郎ハ庸人ゐ。縦せ術ゐ
ても。館山まで路の程十數里ゐ。ゐ。這夜を犯し遣れ。明日ハ龍田へ領て還て。
和郎ゐ祖母妙真ゐ對面せんと思ひ。ゐ。ゐ義成ゐ。異
日義成ゐ。ゐ義を告て。諜し合ゐ。便宜ゐ任せ。惴ゐ要ゐ。ゐ。と諄返し制め
ゐ。親兵衛聞ゐ。ゐ。賢慮ゐ。理ゐ。ゐ。総角の生賢像ゐ。御諚ゐ悖

らば罪なげきく。寔に畏うけれども。古語にも。兵々拙速と貴ぶとそ。ゆえそれ久しく謀の巧なるを
よしとせず。今より那里へ。ふたゝび御方の機密を敵に知らす。透れなくとも。小臣も亦祖母に
對面を急ぎるふたゝねど。そゝ私の恩愛のみ臣なる者の本意にあらず。痛すいなる御曹司虎穴の
内に入れ身を置れていくたの艱苦を受めらんを想像られば一日も千秋に異ならず。然れば神女の
介教にも山路の怒を對治し。快義通を拯命られと宣いせに。這里に宿て今宵と夫に過
あかさり。御許容あらば公私の大幸。その上やいなを。いかゝ。
もあらざれば義賓僅に點頭めて。然まで思ひ禁めいせば。暁方にぞ鳥夜なふ。
心のとも。非如和郎十勝の計略ありとても。その身單なれば危し。我伴當の數を盡しく。咸和
郎に從はせん。他們は都て甲冑の准備を爭何はせと。問れて親兵衛否伴當のヨヌは路
次の煩ひなり。その身の外に一人とも。帮助を求むべくもあらねど。然しも國主の名使と稱て那里へ
赴くなれば。伴若黨一名と鑣隷の奴僕にあるべし。這両個を事足りなん。況甲冑をいと要す。

願はれば礼服一領と貸へのみと。言ひ出そ。義賓主眉を頻に。そは易なとなるべし。和郎は國主の使
と唱て那里へ。ゆきて何とか。と問れて親兵衛然は筆詩策は密るとよりとは。機に臨て変に応じ
術いくらもいん。目今あゆ云云と。安定めいらんかとなり。と答まうせば點頭て。然べば和郎は今
せば。我身甲と掩膊脛甲も柳谷にあんぎゃん。开を礼服の下に着籠め。却誰とか伴若黨に
打扮して遣せとのいつく左右とアクうゆへ。廿古屋京能找歩てその美らで小臣に仰付れかし。
呈義に御曹司に倶しなり。殿基に封ぜ。那里の地の理は既に知れり。且稲村より乗を來る。
馬も這里へは那青海波に及ぶとも。五十歩百歩の間。迂續ぶらん。とへば又與四郎を
席末より。膝に找めて言ひ。願はれ和子の鑣隷に小可を參るべ。兵稔に來守傅ぶ今
倦る大事の伴。立ぶ生甲非のへ。その名を義賓主に。矢ひて八郎は稲村の使者に遣れと。内人自
他の差別のなれば。所望に依るもとうゝ。與四郎は老人駿馬の足に及ぬ。已れと禁めのへ。
與四郎怀ぶを眼と睜て。御諚ぶいへ。小可はその年來山路に熟て。身の衰と。言を覺いへ。

那仙果神將なたらべ所ゆいん千里を走る馬なれども。赴續んと極めて易からんを許さぬのみ絲か。と怨むを呂管請まれば。親兵衛陪補まるを。他へ知せぬぞ。稀古の齡ふれども世老人と同じかんぞ倘路を疲れぬ。極抓まで。小臣。尻馬よ乗せいんぬの美も御ろろ安房べしとぬ義實主人合点して然らば甲乙俱ゆ臣。安房殿へ文の趣を。あく通達せぬもあれば。期ゆ廿位不便ぞくんとのみて。傍と考へて十二郎へ我副馬ぬ。ろも乗て他们と俱ゆ略次をいそぎて見参のようを。射方の陣へ注進せよ。八郎を借るようは別人をとして明日稲村へ遣ぞう思ふ。と仰よ終ぶ與四郎へ。ろ照文も欣然と。俱ゆ言兼あるうけ。登時又義實主へ目見六を啓近つけて。我両箇の柳笹丸。副佩の両刀と。鄭ゆ着る礼服あんん。倘掩膊と脛甲と身甲もあれば。皆廣蓋ぬろも載て快のて来よと分付のべ件の両臣へ義ぬと応へ。いそく俱ゆ立まけ。姑且を見六目へ老侯の副佩の刀。衣裳へ。ろ文の餘の東西をも両三箇の廣蓋ぬ載てりく来。侯の身邊ぬ安排べて。身甲も掩膊脛甲も非常の備ぬ。伴當ぞ。

義實主左見右見て先副佩の両刀を。傍の置て。親兵衛ぬろも對て宣ぬ。和郎へ。ぞ所ぞ。狩我家ぬ大月形小月像と名ける。重代の刀あり。大月形家督と共ぬ昔年義成ぬ譲與へ。とのて件の副佩の刀を。今ぬ抗てぞよ此へ是小月像を夜行ぬ迷ぬ奇特ぬ。世ぬ。ぞ。ぞ。ぞ

刀を合せて抗て宣ふ。親兵衛これを和郎に取せ。おろ與四郎に讓り與へよ。他は馬の鑣隷に
打拾はんとも敵地に朴刀は相応しからぬ。因てこれを取ぬ。卒々とおもへば親兵衛は又膝を
找めて受戴いて禀ていふ。小臣のこゝろは與四郎さまに恁る御恩は有がたきを。那身に餘ていんと
いへば義實主頭を掉て。然はあらじ。他夫婦は両個の媳と共侶に稔和郎に仕へる。功あるを
ものくさの弓に及ぶ。開とゝろ取せ給へ。故主と雖ども道郎のまゝ對面せられば賞は戈戟に倍
べからず。推辭は要なしのふたゝび。親兵衛は。
對ふ。やよ翁よ。貝今御誕の趣を具に拜聽せ。
中刀を與四郎は夢狹とゝろに屡拝戴くの。
後方に佐りて。音音并に曳る單節も。俱に感涙は胸塞りけり。めのべもゝぐりけり。然はば
ざるべ。是等の事は趣とゝろもせ。照文景能以下の近習も目を注ん。這君は。這臣
ある。現美は美栄なりと。感じ思ふのみ。春の夜あれば短く下なり子の五刻はかりにぞ義

實主は親兵衛に。身の暇をあたへて。罷出んとする程。又喝返して宣ふ。和郎が騎馬の
打拾を我に乞か。二門より這方は寺法に騎馬を許されぬ。おろ軍陣の使价は。
勿論非常の大事にあれば。住持は請て玄関の邊より無ん。馬は飽まで豆秣を飼
ゝ。腰戰飯を上るゝ。十一郎八郎は與四郎と共侶に退りて。速く准備せよ。と仰は大
家阿と心て立ゝ。親兵衛は恩賜の衣裳を左の肩に被て退る。後方より照文
景能與四郎は。ち續て退る。おの折まで席末に佐り。姥雪の媳姑音音
并に曳る單節も却て。おの折音音は良人の袂を掴住
めて悄語。上の御恩の深と。就ても小心あるを。老ての勤は勝難。朽
惜しるもあらず。馬は後れて期は合ず。俱に少ひもて侍りん。心はかるは只これのみ。と云は與
四郎は點頭て。心も共に。景能は後れじとそ。袖ち拂て。庫裡の戸を走りける。程は
義實主は次の間に侍りて。近習を召て云云と。住持は請ふ事の趣その餘も下知を偽は

べ。且親兵衛們が身装し。立ちんと為る折快知らせよと分付めべ。近習の屋応を為たり。ろろ辺果て立ちけり。左右を程ふ真夜半の鐘鎬々と鳴く時候件の近習い走り来り。親兵衛們が身装皆整ひて。と報るふ義實然いとて。遽く身を起しめい。目いあん佩刀を持て後方ふ従ひ見六郎い提燭を秉て。躯く先ゆぞ立ちける既ふして義實主い玄関ふ立出めべ。笠音の曳る単節と俱ふ力二尺八寸も嗅覚して。式台ふ聚合ける。又老侯の伴當い大家廣庭ふ生列れて。支の容を報るものヨヌろ。然が住持役僧們い義實主の身真後ふ侍り。沙弥喝食們い所化寮の窓より闖くも勘らぬ。今宵い天好晴れも晦ふ近き月の昇らぬ。遮莫玄関の邊ふ。秘尾石の左右ふヨヌく庭燎を焼くり。れい烏夜ふも送る隈ふて。白晝の如く明るけり。小程ふ大江親兵衛い青葱縁の身甲ふ鉄打る細鎌子の鉄環く。上ふ。綯の飾磨紺の厨子縅小袖の中黒の花弁ふ。着下下ふ薄紅の腰縛の小袖二可うち襲被て。純褐の長袴の。も中黒の花弁ふ。着下下ふ。穿る袴の襠ふと巧く綢揚げ。鞋い

撒金ふ。箭竹龍胆を描金ふ。を。絲柄の短刀ふ小月形の名刀を。瑞巧ふ腰ふ跨え。細柄ある馬上張燈を。針を帯の間ふ挿て。那名馬青海波ふ。雲珠鞍置て。真紅の厚總の燃ふ可き。を。掛ける。ふ。ち。跨り。紫ふと白と絞分る。鞍ふ

馬を走らしく
親兵衛星夜
大山寺を出づ

意氣揚々る打扮と覩る者齊一稱賛し。憶ぞ耶々と喝采ふけ。登時親兵衛馬を駐めて。玄関ふち朝に鞍の前輪ふ額御俯ぞ。義貫主親に聲を被て適愛ふ勇士の行藏我に明日より沒ず吉左右を。龍田の城ふ候て在ん曉天近し。快哉と仰ふ親兵衛阿と応て。馬ふ拍れ兼遠く。親を間ふ当る三門口與四郎も亦後れじと。奪ふ父が日と逐ふ勢ひあり。後方ふ續く景能照文腰ふ吊る張燈ふ。烏夜の螢火と見光ぬて。並樹の松の右ひだり。三町ふまりを瞬間ふ。えやくやたえぬりふけり。

第百七回

大江親兵衛活ふ素藤を捉ふ
里見御曹司優ふ陣營ふ還る

却説大江親兵衛仁に當晩。名馬青海波ふ跨て。大出寺を出ち。絶ふ二晌許て素藤ぞ館山の城ふ程遠く。安上總州夷濡郡羽賀の郷の頭ふ。並松原まで騎着しふ天に明ぬ。だ明ざり。ふの時照文景能に。俱ふ後れてはまぐえを唯姥雪與四郎のを。駃馬ふ赶携りて。一町も後るを。ふく。俱ふふの地方まで来ふけれ。親兵衛深く嘆賞し。翁に齢頽ぬなるふ路と千里の馬と。俱ふ鳥夜ふも迷ひて。逸早く十數里と来ふ。又是一奇とふべし。意ふ年来霊山ふ心神と頤ひて。仙骨と沼ふけん。併伏姫神の擁護も蔡ふりけんか。ふよ與四郎。合笑ていはく。我身ぞ。奔走思ひの隨ふまで。壮年ふ弥増せに。是ふ神女の冥助ぞ。べ。蛮崎古屋の赶着まで。茲ぞ憩ひのぞ。とふふ親兵衛點頭て。那這と。久ふ在暁の月既ふ出て。と明うける樹間ふ。舊ふ佛堂あり。かべ。躰て馬より下立て。這廢堂の縁頰ふ尻ぞ。ち。撫て憩ひて。ぞり。當下與四郎に袂ふ。ふ巾と。食ふ汗を拭て馬ふ。草を食せるを。左右ふ。程ふ天に明て。鳥の森を離る。時侯景能照文二騎相並び。ふ。ふ。親兵衛の。々在り。ち見て。俱馬より下て。主僕と。ふ。労ふけり。就中與四郎ぞ。青海波ふ後れぞ。と。走りふ。胆を潰して。最恥く思ふのふ。鑣隷の奴僕們に。酷く後れけんぞ。ぞ。登時親兵衛ぞふ。和殿們既ふ来ぞ。這里まで。時を

移さるべし。我は快館山なる敵城に赴いて御曹司を拯奪りて、益ある奴隷を多く召抱へ、苫屋主の無くる馬は這頭に繋置れか。快く照文景能異議なく、まづ応べと応て。親兵衛が今日の謀慮をまづ知るべし。今ぞ心ゆく思ふのみ。住てあるべきかあらざるべき景能は遽く身装を更めて、伴若黨に打扮け、照文は又景能が馬を乗捨置んを惜むあるねども、一足たりとも軍陣に必要あるのみ。我が歩行より御陣に赴いて二足の馬を牽んとの浩処に後れて来る照文景能が伴の鑣隷僕侶は疲るる足を曳て、折ふく迂着得ずければ大家他人を労ひて、一要時喘を定めさせ照文は又馬にうち跨り、苫屋が伴の奴隷に景能の無捨る馬を牽て相俱して、國主の陣へぞ赴けり。却説大江親兵衛は景能と與四郎を馬の左右に従て館山の城へ赴く程に、朝日隈なく半竿昇て、路傍に開初る山櫻の露馨を見て既にして親兵衛は館山の城の正門に迫りて一町許這方より景能を走らして、喚門を呼ぶ景能悍る氣色なく、單正門の橋際に杖向ひて、聲高に喚るやう。籠城の人々ものいん目

今國主のみ使大江親兵衛仁義なれり。主僕絶ふ三名なるに駭怕れて、丞前を設ち、銃丸を飛まして拒むべからざるを主長に報知して城門を開いて迎へ、と。両三番喚門程に親兵衛も赤馬を杖めて、主僕三名、正門なる橋を渡りて、鐵門の頭に立てりける。その時館山の城兵は久しく國主の大軍に囲まれて、籠中の鳥に似たれども、然べき又攻も敷れず、防禦の外に他事もなく。四門の衛戍は、警を憶ぶる日を弥々に忽地國主の使价と名告て、最尊大に喚門ひ、士卒驚き且訝りて、間児の小鋪より張見る思ふも似ぬ主僕三名騎馬なれば、少手ゆく。鑣奴い若人へ壮なるい若黨のみ他は誰何と、京惑ひて遽く退て、這隊の頭人、礪時願八業當に報ゆ。願は听々肩を聳めて、城楼に登りて、これを見るに果して違ひければ、左右をうつ冷笑ひて、意ふに義成攻獻倦て和議の使に那小児を、ふ。こは、ぞ、ん、ぞ、ん、ぞ、ん

リ。語は人の親子と其子とセガレと。セガレは世間の地郎のよう。なぞと轉じて後生を罵てセガレ。近世の軍記にえり餘も皆これを做ひる

うち跨り。大江親兵衛仁と名告て。僅に両個の伴當を従へ。胆太くも正門なる。御橋を既に渡り。来て對面を請ふとの。因て猜しかの義成。久く攻厭倦て。せん術のなき隨に義通と。雲替に。濱路姫を餽送んとの和睦の使价に。計ひかんやとの。素藤矣しに。听々屢。黙頭て。開を推量に。左ほどなく。必和議の使价なるべし。然るを某甲某乙と。呼べる。二三の老黨と。図て。二十に足らぬ猴子を。大事の使价に立てしかよく。剛と。征きとの。拙策なる。欺。今ぞ。行悠失のても。怯を取りても。弱輩。これ許されと思量り。所行なん。開を左れ。若も。これ。飽まで。武威を。赫奕き。開奴に。胆を潰させ。事の准備に。怠々に。箇様々々に。計ふべし。

なの。議を。餘の老黨に。士卒に。相俗て。事整ず。城内へ。開奴を。容れて。密内をせよ。我書院に。對面せん。快くせよとの。ぞ。願ハ異議なく。感服を。義ぬと。応て。走て。外面退りけり。小程に。大江親兵衛。城の門前に。馬を駐めて。主僕。三人。暫。頻りに。焦燥て。隨に。景。能と。與四郎。迭代に。城門を。敲て。開よと。喚れども。城内なる。雑兵。仁。答なの。

速に。開くべきもの。ぞ。侍り。程に。礒時。願ハ。平田張金作。與冬と。共。伯に。華やかなる。武具。きて。隊兵。ヨリ。領て。出て。来る。正門を。成る。雑兵。仁。目を。注て。下知を。偽て。寄隊の。陣より。来。

ぬと。ゆえ。大江親兵衛と。称。喚。做。る。猴子。主僕。門外に。在る。ぞ。内へ。入れよと。喚れ。雑兵。

仁。心と。合て。角門を。推開て。卒。使价。入。

ぬ。若。仁。ぞ。我身。単。害。怕。ぞ。其。甚。紀。縦。城門を。咸。所。とも。後より。續く。敵。

君子。曰。径。よ。況。国主。使价。として。角門より。入る。ある。礼儀。知。日物。

と。宣。られて。願ハ。金作。悠。而。聲。ぬり。立て。喧。猴子。奴。月。蜀。寄隊。大軍。肩。

とも。あ。ぬ。我君。武威。と。今。誰。憚。紀。老黨。擇て。使价。

ぬ。城門を。開て。入れ。せん。寄隊。陣。人。入。紀。年。幾。知。れ。ども。額髮。少年。加。

犬江と。名告。れ。狗。賈。を。相。心。く。ぬ。開。角門。入。れ。六分。過。る。待。紀。

と。思。で。過。言。身。程。知。白物。と。遣。返。親兵衛。呵々。と。笑。て。若。ぞ。

古の賢人の例を思ふ武内宿禰は年十四の時天皇行幸の勅詔を奉り北陸及東方諸国を巡察して百姓の叛るを治めつゝ又日本武尊は十八の年熊襲の魁帥を殺しの巧みなる川上梟師を誅しの巧みなる厩戸の皇子聖徳太子のごとき生まるゝの聖なる聰明睿智傳稀なる又応神の太子兎道の稚郎子は髪を剪て智慧廣大始く百済の王仁らに就て天朝漢学の開祖たり遠く世に迫りて菅家は五歳にして五言絶句の作あり後醍醐の八歳の宮孝順恋字の歌あり又その武勇の捷れたる安陪貞任が獨子千代童子十三歳にして萬夫無當の勇あり楠正行十三歳父正成の遺訓を守りて既に恢復の大志あり況の它源為朝源太義平源牛孺曽我箱王義朝の金王教経の菊王熱田の御所五郎丸枚舉するに遑あらず是をもて観るに才あるは人の賢と不肖とを老小とせず論ずや且我家弟と犬江と生るとも狗賓より入るものなるべ若们が主と憑む墓田は溷より出て墓田の墓が溷より出て迎るとも要せざれ大江も亦角

門より決して出入せざるべきぞよの義は什麼と詰られてそれはたゞ願八盆作頭は立ても理の當然なれ爭ひて出でよ出でよもとゝ先快士卒を走らして親兵衛の馬の蹄を注進あり故意門卒を叱りて大門を開せける登時大江親兵衛は馬より降りと下立て門内に找入る程に願八盆作相迎へて名告しつゝ安内に立けりその事の為体墓田が士卒先々と鎧ふるの三百名左右二行に相備へて長鎗眉尖刀を見光めて弦に弓箭鳥銃を稚乃て專虎威を張るのみ親兵衛は自若として毫だにもたゆまず引れて中門に迫るまで景能は隷後にして左右に眼を配りつゝ小程に與四郎も續いて馬を牽入れしを城の士卒們罵り外めて曰ふ漫に疾歩よとのゝ與四郎冷笑して靜謐なる異の折ふゝ馬を門前に繋ぎもせん這竜城の最中に来て獨り外に主を待んや時宜を思ふに衆人々るゝ所なれども果ぞ城の雑兵二三十名群立蒐りて推戻さんとす閲く程に名馬も事情を知りけん忽地に嘶いて狂ひて前より找むを噬倒し後より寄るを

蹴返へ〻る勢に林ホむぐもの〻ごとく。衆兵齊一駭誤ぜて。憶ひも打擇せず程ホ與四郎ハ馬と倶ホ。突然いとして中門を過りて玄関の頭ホ來よけり。登時顧八盆作も件の息劇をたゝ入りて。苦々あくハ思ホのゝ。大事の前ゐ小事ホそと思ひ返へ〻て。迂蒐ゆゑ。雑兵們ホ目を注して。禁めてゐ間も親兵衛の先ホ立ち。既ホ玄関の式台ホ登る折親兵衛ハ帯ル刀を帯て。伴當ホ遞与させ。顧八盆作共ホ外ロ。あをを礼ゐ。作法を知らぬ諸侯〻ハ。使臣さる者両刀を帯て。玄関へ登ることを許さゝ最鳥許と制ぜ。親兵衛聞ぬ。冷笑して。然だりのゐ知らぬ人ホ尊卑ハ。礼ホ吉凶ハ。我君ハ是房総の國主。里見原ゑの麾下の城将。所領一郡の外ゑ。縱和順の折へも。對心の気ホ及ぶべ〻ぬ。矧謀叛竜城せ。れて怨敵御方と分れ。ハ只軍陣の作法ホ由るべ。約莫ゑの君の使として。敵城ホ來る者身ホ帯る刀を放さず。斗降人ホ異ゐ〻ぬ。且這刀ハ君家の重宝。我老侯の賜ゐれば。權且も身を放へ〻ぬ。盆作

ゐ。外ロハ。快々案内ホ達ぬ。と答て。從ふべ〻もあ〻ぬ。願八も盆作ホ。先度ホ懲りて。爭ぬ。肚裏ホ冷笑ひて。只今何ともいゞ〻へ。主君對面の折ホ。猫児ホ逢る鼠の像く。頭を抬げ。ぎ〻んホと。呑ぬ。ぐ〻ぬ。ぬ。貌して。躰く書院へ伴へ。景能と與四郎ハ倶ホ玄関の簷下ホ。ハ。今奥ホ入る親兵衛ハ。坐席の背影を。自送りて。心悄々地ホ伏姫神の擁護を祈念ゐ。ける。却説大江親兵衛ハ。坐席幾間ゐ。ち過て。長廊下を。辿り來て。儲の書院ホ赴。とゐれば。墓田素藤ハ。朱緞の甲の。吊腿の。ゐ。ゐ。紋紺錦の戰袍を。披下ハ。堆朱の刻函の大刀を佩て。膝ホ鐵骨の軍扇を。衝建。虎彪の皮を。ち累たる。裃子ホ坐して。上座ホ在り。左右ホ侍る老。黨。両個ハ。奥利本膳。盛衡。浅木碗九郎。嘉倶。倶ホ玄草綴の鎧を。擐ゐ。ホも。披膊を。ハ。着け。象頭と。敷函の。解る。刀。戎腰ホ帯ゐ。ハ。の。餘。究竟の。力士。四。五十名。短鎗。眉。尖刀の。鞘を。除して。三行ホ侍立して。一百有餘の雑兵ゐ。弓。箭。火銃。を。ゐ。ホ持て。孫廂の下ホ。羅列れゐ。ゐの。叉の。為体。

齊々整々として猛威を赫奕し素破とばかりも蒐る武面魂都て一人當千と見えぎ
ぬいるるけり當下願八金作い倶ふ書院の縁頬ふ跪き寄隊の使臣大江親
兵衛どもん下知ふより領てまゐりぬと名告とまれば素藤い其方ゑ伝とる程ふ親兵衛い
揖讓もせず長袴の下遣返して誕使ゑれば勿論上席冥く用捨あるべしとのたまへ
找登りて床間る鎧櫃を掖出し尻うち掛て正面る第一の上座ふ着しが素藤
主従一個として足れて瞻仰ざるいなく他い誰何とぞりふ早ふ外るのもゑし登時素
藤勃然と怒れる聲を苛立て噫を慙る猴子ゑ狂態ありふ這奴い瘋人ゑ
んゑ引揭降ざるを勢い猛く下知あるを聲共侶ふ碗九郎本膳願八金作們る
羇りぬと応て大家蒐れと身を起せば四下ふ守護の力士毎咄と嘩て短兵を見めて
先親兵衛を推捕稠て毀んとも那時遲し這時速し奇るかる親兵衛ゑ懐
より一道の光颯と粲爛きを打向兵毎の面を撲地と撻しゑ大家都て眼を射

られて諸聲高く苦と叫ぶ碗九本膳願八金作力士も倶ふ動ずして簀子ふ腰を撲惱
式い柱ふ頭を破りて平張俯る仮ふて一霎時い起もゑざりけり今這奇ある光景ふ外直る
雑兵們い驚駭怕れて找を泡を黒罵を蹈くゑ韓盧を吠る瘦狗の門ふ聚合ふ似たりける
登時親兵衛聲高ふ若們何を無礼る甚田い我名歴毛下の城将虎狼の野心を逞く
あて今龍城ふ既ふも軍陣の作法とて國主の使者を迎ゑふ恁まで傲慢る非礼を
容ざる天四訓覿面恁ても悔ざ懲りざと罵責られて素藤も驚ぎ亳も怯まず
眼を瞪ら聲ゆり立て猴子奴ゑ彼ありとても我刀尖ふ向んや井里る退ぞと敦圉く突と
身を起し引抜く大刀風両段ふ亢と丁と毀るを親兵衛噪ぎ身を反して扇子をのそ
那這と柔柱ひぐら耶と聲ゆけて刃を礙と打零ず素藤吐嗟と踏入て組んと找むを引
着て項を抗を揉輾て隻足ふ楚と踏伏せり現比類ゑ勇力ふ厭れて甚楚堪く素
素藤い千曳の石を背ふ受る心地やあれ面色死土の如く饒せと叫べども吭逼りて聲

文溪堂藏

文溪堂藏

立ち絶る可ふ呻吟ぬ。ゆ。偖り一程ふ願八盆作本膳も碗九郎も力士们の為うやふ我ふ復りて共侶ふ身を起しゝ眼睛を定めて。それが。を動ゆ素藤ゝ酷く親兵衛ふ踏伏られて。呼吸も絶死形勢。それが大家吐嗟と駭噪ぬて。極ゝ合まく思へども。初ふ懲りて。和郎立ね和主且試ふ先ゝ蒐れと。厮讓る。虞芮の訟果一ゝく分惑ひ。為る田の畔の蛙兒ふ似る面框咸停跂て長視て。ゆ。登時素藤聲戰ゝやよ。為兵衛我を救へ命ふ代る東西ゆ。紀ふ。勸解よゝと叫ぶ。親兵衛呵々とうち笑ひて。憶病鬼の受地子。母主の命を。とゝ。皆縁類ふ。出雑列れて。我託宣を拜聽せよ。倘又不の字とゆ。者ゆ。一厭申て素藤を。踏殺さ。立ち。とゆ。れて。答も投頭の尋念ふ。逞ゆ。ぬ。ゆ。言半句も。爭ふ。ゆ。皆刃を捐鋒を倒して。頭を低腰を折め。何容ゝとして。縁類ふ。出ゝ。命を。と。ん。と。願八盆作。ゆ。碗九本膳力士们。外面ふ在る雑兵。人。けれ。推合て。繡眼鳥の像く。立ぬ。ゆ。その間ふ親兵衛ふ力士ゆ。葉ゆ。捕索の臂近ふ。

満呂又麻呂ふ作る安房の地名

る。撥合ゝ。ゆ。く。素藤を。緊ゝ。綱て。動ゆ。ぬ。ぞ。伏。傍ふ。寄着て。縁類ふ。並び。坐る。逆徒ふ。對て。示ぬ。ゆ。ぞ。れ。同悪の白物ゝ。の期ふ。及び。命を。惜ひ。欲狂ふ。猿馬を。丹田ふ。く。推鎮ふ。謹て。我ゝ。ゆ。ぬ。ゆ。ゝ。ぬ。ゆ。ゝ。這。素藤ゝ。近江の山賊但鳥跳六。業因ゆ。獨子。ぬ。初ゝ。但鳥源金太と。喝。做ゝ。原是。刑餘の。罪人。ゆ。ゝ。ば。當年。ゝ。の。地ゝ。免れ。ぬ。ぞ。愚民を。惑ゝ。栄利を。誘ゝ。小鞠谷如。満ゆ。家臣。ける。鬼蒼幸弥太。遠親を。唆誘ゝ。如。満ゝ。我ゝ。城地を。奪ふ。て。罪を。遠親ふ。負ゝ。る。奸計立。地ふ。成熟ゝ。て。夷。蕩ゝ。横領。ぬ。れ。ぬ。ぞ。當時ゝ。その。悪。発覚。れ。ぬ。ぞ。初。病民。と。ゆ。く。赦ゝ。功。あ。ゝ。ゆ。ゝ。ぬ。ゆ。ゝ。ぬ。ゆ。ゝ。ぬ

舎に殺されつ。抑我身に同因果の義兄弟七名あり。その宿所定める毎に富山なる伏姫神の
寶助なるぞとぞ宣めるし。誠中我親兵衛仁は年四の秋より一人又那神女の擁護を蒙り六
稔富山に生育る。今茲は甫の九歳なれども見よ身長さへ心術さへ恁まで大なり。居ながら
誰も敬馬に仰ぎざるべき神変不測無類の神童三人と有るとは有るとはいれば結縁の為に幹せよ
然べ我這素藤の素生と好詐とを知るも身單誕使に立てるも皆是神女の示教に
憑れり。昔唐山なる秦の甘羅は年十二の童なるしに呂不韋に説て趙に使し大功あるしを。
司馬遷が史記に書載せしより唐人は詩にも賦にも物語りて唱嘆あれば皇國なる
這親兵衛仁はその功甘羅に孰與ぞ。開左なれば若もあれ約束我義兄弟に感得の霊玉あり。
その玉に八行の文字を分ちて主每に一字づゝ自然とあり。開て我持る八仁字の玉に因て名を仁と
の告りあれ若們我を殺さんとせば折光に撲れて度を失ひ我霊玉の奇特なる幻術をん猜
せば這素藤が愛玩ぶ邪術に思ひ比べ欲淺慮臆断笑べし。縦素藤邪術をもて御

曹司と捉りなりて。計畧を沼りとも我君仁義の大軍に攻潰しぬるの石をもりく卵を
厭はまりもいと易けれども這城内へ駈合まれる罪なる民の尾礫と共に焼れんを憐愍ひて
最寛宥なる計ひ唯御曹司を思召す故のまふあらぬを若們愚物の本性を漫に誇りく。
我君を做事あらで。と侮りる報ひを目今知るべし。先非を悔いくおのゝとも皆是五逆の罪
人なれば誰一人も饒さるべき刑罰躍を旋さで梟首せられんのみなるべし我又神女の示教に憑
そ仇に報ふの徳をもそ。曼讃信の仁を施さで若們生て今まで在るや。先安く見るべ
よ。御曹司はなほ慈悲の因を請まりて我も亦御陣に参りて囚主の大赦を請ひ
まつらん。倘若兩の計ひあらば素藤が首をもて誅して首級を御陣へ献せん。若們首を接まく
願ひ目今玄関の頭に在る我伴當に報知して御曹司を送りなる事の准備をせよ。我俱
若黨に曩に諏訪の社頭にて若們が欠銃に殺れる御方の近臣甘呂屋八郎即是那
折都て深痍に仆れ御曹司の伴當に亦是神女の寶助によりて蘇生て稲村の城に帰り。

倭まで天福神助多き国主なりと雪ぐるの天に對して唾吐くより。三尺甲斐も亮白物くけり。快々せざるを。言懲せば願八盆作碗九本膳以下の兄黨吉と掉を戰に怕れて仔細に及ばず。乘ぬと心得て本膳と碗九郎に走りて外面に赴き。先甘屋景能に親兵衛が奇異武勇の事の趣并に笹竜城の將卒が咸降參の義を報知して。案内をして義通君に身邊へ近く赴けば。單表里見御曹司義通君に久しく當城の屏れ竜られて慰めまゐらせるを。柵締る一室の内に早くも日思に付るも賊徒本膳碗九郎が甘屋景能と倶に來て。城兵都て降參の事情を告まうして遽しく囹圄を披き別室に出まゐせて儲の褥に請登されば景能恥て見參をそ恙なりと祝ぎまゐらせ。然而大江親兵衛が武勇大功の速なる事の由を告まうせば本膳と碗九郎に歸降のよしを伝えあげて。御陣へ送りまゐらん。徐に出さを主ひとと茶をまゐらせ果子を薦めてとき勅り尉慰めけり。義通君は是答れよりとはくとうち聞て景能に宣まう。我も那大江ぐるの人の噂に知るのみ。尚総角ゆてかくの如き武功のよしを思ふ

ゆゑと恥じ。我うへ時の不祥にあれども久しく賊徒に屏竜られ。或へ城樓に推登されて責頑恥れうけると。躬方の士卒も嚴君も悉く生て還るが孰しそこの俤に阿容ゐと大人に見參るべき。初めてく轎子ゆうち乗せて初の如く居ヨの士卒。我從へぎ。則と雪ぐよりわるぎ什麻ぢの弐とよくさるやと問れて本膳碗九郎に景能が答を待ぎ。俱に額衝て喜ぶ。その弐れ。ろ安ろべ。ゐ轎子に損ぐ。當城に藏めてあり。然城内の士卒數を盡くあり伴と仕ん呂穏便の御沙汰をのみ願ひくそ。とち陪話く。走りて書院に赴ぎ。景能に冷笑して。幼君を守護しとり。偖而本膳碗九郎に故の縁頗に入り。親兵衛に對して。義通君のゐ答箇様々と告ぐ。親兵衛然そと點頭て。現大將の器智勇自然と備りぬ。今ちの坐席へ迎まりて見參に入べけれども。ゐ父君の倭に知りて胸安ぎ御坐ぎ。なれ若们ゐ送りの准備を。整へよ。ぞ中に願八盆作及碗九郎本膳とそ。ゐん。その餘も重立る兵毎に皆高縛て。御

陣へ參れ縱雜兵ありとても或は武具を着用し或は腰刀を帶ることを許さぬの令を叛く
ものあらば先素藤より屠戮あらん皆悉頸を刎ん後方に侍る力士每願八と盆作に
索を撓てうち戍れ那奴両個は素藤が惡を資け舊盜を努々由斷せべからず本膳と
碗九郎には腰索を被て死送りの事の准備を勤さえん快々せよとのそぞせば力士們も
身の崇を怕れて推辭とを泛ぶ先願八と盆作は武具を脱して緣頰より推下して
索を被け又碗九郎本膳は小刀を饒ぎて是も亦綱りて緣頰に牽居う浩然は
這城内なる百姓們は素藤既に生拘られて餘類は降參せよ偽らず皆捕ばて四
門を戍る頭人を搦捕り細縛て牽ゝ書院の庭に來る然而親兵衛は訴るを恐
れるゝ我們は夷濱の良民每でいひしを素藤は駈令られ他が軍役に從ひ實に
本意にいなび小なる逆將俘はせられて當城にんて入りしかの洟ぬえしより怡
悅に堪ず隨即守門の頭人們を搦捕て呈献せり其の餘の雜兵仂武者ども

事の敗れは駭怕れて咸副門より山路を投て走て落亡ぬと告れば親兵衛領して并ハ
切てものの多り此今當城に在る若曹良民なるの幾名ぞと問へば答て然は二三百名いんと
いふは親兵衛又領して然ればこの一百五十名は御曹司の伴ひて御陣へ送りなれ又二百五十名は
我伴富姥雪與四郎を頭人として權且當城を戍べし又素藤とが筒樣々々慫々ふして
領てもん杉木と車の准備をせよ先若們は一火の内中はよろしくる者両三名を安く御陣へ
走りまわりて是ものゝ注進せよその餘は這願八と盆作とも牽預りて我当る折を待ね又
力士們は本膳と碗九郎を牽りて退りく死輪子の准備をせよ多くる狩と言示せば百姓
們は勢ひ兼て願八盆作を受令りて守門の頭人共侶は牽立て皆退りしかば力士并は
雜兵們は嘆息ゝ皆悉大刀も鐵鎧も脱棄て本膳碗九と先は立ても皆外面へ
出けり姑且ゝ力士們は四五名書院へかへり來て親兵衛はうち對して御曹司をも送
その准備整ひぬと報るを親兵衛はうち听て然ばこそ我もまん伴せん案内をせよと赴立

老。細り措る素藤と小兒の像く腋下に抱えて。そゞ俗玄関に出るが。與四郎躯て走り寄て事の狀どを舒ゞと。その時親兵衛が。與四郎に權旦當城に留りて。守るべき上旨を言示し。又百姓們を喚よせて。卒とそ素藤を遞與せに。大家豫の下知に違ぎ。素藤を受合て。杉木の杪に細羌者て。勝げ車に推建け。徒り一程に義通君が。鄕高に社参に被ひる礼服と。蒼のごくに装ひ。小刀を帶て。景能を從へ。出のひ。親兵衛に對ひて。神速の大功と與賞て。狀どを演ゆ。親兵衛が。謹て。歸陣を祝して。直ち他御覽せよ。素藤と長杉木の杪ぎ大に。登り。御陣へ奉り。徒て君ゞ會稔昔の恥を雪るに足りぬべし。快々出させゆひね。とに義通笑ひけるうち。點頭く立ゆ。百姓們ゞ。ろ。て。轎子と舁寄せけり。畢竟里見御曹司父の陣営に送還されく。後の說話甚麽ぞ。开ゝ次の卷に解分ると聽ふかし。

南總里見八犬傳第九輯卷之八終